
霸玄の糸

河合空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霸玄の糸

【Z-ONE】

Z7063C

【作者名】

河合空

【あらすじ】

黒い天使の奏希は洗礼の儀の日、薄紫の男に神直属の兵である『騎琉』に任命される。断る奏希だったが、半ば無理矢理承諾せられ、二日後に誓いの儀を受けることになり……。

第一章 絡み始めた糸（前書き）

この話は基本的にはシリアスです。物語が進むにつれ暗くなっていますので、明るい話を読みたいとお思いの方は読まないほうがいいかと思われます（汗）

全然OKという方は本文へお進みください。

第一章 緒み始めた糸

蔑笑
ちようしよう
疎外
そがい

もつりんざりだった。

何故俺は羽根が黒いのか
何故俺は髪が黒いのか
何故俺は瞳が黒いのか

何故俺は天使として生まれてきたのか……

「…そ…さ、奏希！—！」

名前を呼ぶ声で目が覚めた。

「つらすりと田を開けばそこには鮮やかな紅が広がっている。

「う……朱鷺……？」

真つ赤な長い髪。同じくらい鮮やかな紅い羽根。そして黄金の瞳。俺の唯一の友達、朱鷺は慌てたように俺の身体を揺すっている。

「何……せつかく気持ちよく寝てたのに……。」

小さく唸りながらゆっくりと起き上がる。

そんなに時間はたっていないはずだ。頭上には真青な空が広がっている。

「奏希……、今日何があるか覚えてる?」

少し呆れたように朱鷺は問いかけてくる。

「今日……? 今日は靈暦238年宵^{よし}の月の9日。…………あ……。」

そういえばつい20日ほど前、誰かがこの田に洗礼の儀が執り行われると言っていたような気がする。

「大司教様、かなり御立腹だよ。どうするつもり? もうそろそろ儀は終わる頃だけど……。」

俺の遅刻や欠席はいつものこと。けれどもこの儀をサボるのはあまり好ましくない。

「とりあえず神殿に行って謝る。……しかないな。」

「だね。じゃ早く行こう。」

朱鷺は俺の腕を引き、真紅の翼を勢いよく広げて飛び立つ。

「……そんな急がなくつたっていいだろ。」

小さく溜息をつく。けれども朱鷺が俺のためを思ってくれているのがわかるから何も言わない。

俺も翼を広げて空を駆ける。

その色は漆黒。

天使ではまず有り得ない色。

漆黒と真紅の羽根は折重なり合い、空を舞う。

たつた二人だけの親友。
絆は決して壊れないと、そう信じていた。

「何故洗礼の儀に遅れたのですか？第203期生奏希。」

目の前にいる白い上等な衣装を着た女が威厳たっぷりに口を開く。
さすが
流石に大司教という地位にいるだけはある。威圧感だけは一人前だ。

「だからさつきから寝坊だと言つてはいるではないですか。今日の天気があまりにもよかつたので黄愁の丘の上で寝ていました。」

これでもう三度目になる。素直に反省しているのだからいい加減ごちやこちや言つのは止めてほしい。

処分するならする、しないならしないではつきりすればいいのに。ただ小言を言うだけなら馬鹿にだつてできる。

「聞いているのですか？」

「いえ、まつたく。処分がないのならもう帰つてもいいですか？」

その返答は無能な大司教様の怒りのボルテージを更に上げたようだ。顔が真っ赤になり、眉間の皺もより深く刻まれる。

「貴方という人はっ……。」

「貴方が俺に規律を守れとおっしゃるのですか？ずっと俺を見なかつた貴方が、大司教の地位についた途端に説教ですか？随分と偉くなりましたね……。貴方は自分の力を過信している。今一度我が身を見直しては如何ですか？偉大なる大司教様：？」

埒^{らち}のあかない言い合ひなんてそれこそ時間の無駄だ。規律とは集団に必要なものであり、朱鷺しかいない俺には到底必要なものだ。目の前の女の顔色は赤から青に変わっていた。

これ以上話す事などない。身体を反転させ、神殿を出ようと足を踏み出す。

その瞬間、奇妙な感覚に襲われた。何かがいる……。

「ほう、やつと気付いたのか。とりあえずは合格だな。」

振り返ればそこには人がいた。

ちょうど大司教の後ろ。聖なる十字架の前にある卓の上に、そいつは座っていた。

肩口まである淡い紫の髪に上下真っ白な服。整っている、といえは聞こえはいいが、まるで作り物のような顔立ちはなんだか気味の悪い印象を与えた。

女性特有の身体の凹凸が見当たらないので、とりあえず性別は男でいいのだろう。

その髪と同じ色をした目が真っ直ぐに俺を射抜く。
目を逸らしたいのに逸らせない。

「だが、感情的になつて気が疎かになるようじやいけない。全て受け流せ。その女が言つことも、周りが言つことも。でなければ騎琉きりゅうは勤まらない。」

「…キ、リュウ……？」

聞き慣れない言葉だ。怪訝な顔をする俺に、そいつは笑つて頷いた。

「騎琉とは、神の意に従い神のために戦つもの。つまり神直属の兵だ。」

「お待ちください、りゅうき龍騎様。規律を一つとして守らないこのようなものにそのような大役、勤まろう筈がありませぬ。どうぞお考え直しぐださい。」

どつやら田の前にいるこの小柄な男は龍騎といひらしい。いつたい、こいつは誰なのか。

天使の頂点に立っているはずの大司教より立場は上のようだ。しかし、それは唯一神のみだったはずだ。

「大司教ごときが何をいつ。これは我々の決定だ。異論は認めない。」

「つ……申し訳ありません。」

そいつはいとも簡単に大司教を黙らせた。

「…先ほど言つたように異論は認めない。一日後だ。離宮殿にて誓いの儀を執り行う。これは我らが神に更なる忠誠を誓つ場。御方の手足となり必要とあらば命さえ差し出す……。当面の世話係は俺だ。わからぬことがあれば何でも聞くがいい。」

その男は俺のことなどお構いなく一気に言い切る。が、こちりとてわけのわからぬものにいきなりなれと言われてはいそうですか、と従うことはできない。

「…断る。大体、俺はその騎琉が何なのかさえわからないんだ。それに俺は神とやらに忠誠を誓つ氣もない。」

「奏希！？」

大司教の悲鳴にも似た声が響く。当然だらう。今の俺の発言は、唯一絶対の神を冒涜するものだ。

魂を抹消されたとて文句は言えない。

「異論は認めないと言つたはずだが……？お前がなんと言おうと儀は一日後の正午だ。遅刻は許さない。」

言いたいことだけを言い終えるとそいつは瞬く間に跡形もなく消えてしまった。あの奇妙な感覚も消えうせ、神殿にはいつも静けさが戻ってきていた。

「…………。」「

自分の知らないところで何かが動き出そうとしている。それも、これは決していい方へは動いてくれないだろ？
そんな確信にも似た予感がしていた。

神殿から出ると、待ち侘びていたかのように朱鷺が駆け寄ってきた。

「今日は随分と時間がかかったね。大司教様、そんなに怒つてた？」

朱鷺はいつも待っていてくれる。どんなに時間が経とうとも、決して一人で帰ることはなかった。

朱鷺だけが俺のことを理解し、共に歩んでくれる。

性格は正反対だが、不思議と反発することはなかった。それは同じ孤独を知っているからなのだろう。

「まあな。同じことを何度も繰り返されたぞ。」

うんざりした顔を作つて先ほどのことを説明する。けれどあの龍騎と呼ばれていた奇妙な男については一言も言わなかつた。

わけのわからないことに朱鷺を巻き込みたくないのが半分、俺自身が事態を飲み込めていないのが半分。どちらにせよ、簡単に口に出していいこととは思えなかつた。

「なあ、今度瞑皇の一砦跡に行つてみないか？」

「うん、確か天地対戦の戦場だつたんだよね？」

「ああ、未だに色々なものが遺つてるらしいぜ。武器とか調度品とか。」

「そつなんだ？ 楽しみだな。」

家に帰り着いたのはすっかり辺りが暗くなってきてからだった。

当然、部屋の中も暗い。

ランプを灯す。と、再びあの奇妙な感覚に襲われた。

指の先まで緊張感が走る。圧倒的な力を持ったものがここにいる。

「随分と遅いお帰りだな。寄り道もいいが、少しは家の片付けでもしたらどうだ？本ばかりがあつて埃っぽい。」

やつぱりそいつは他人のことなんてお構いなしで自分の言いたいことだけを言つ。

「……何故ここにいるんだ？俺は勝手に入つていいなんて言つてないぞ。」

「当面の世話係つは俺だと言つただる。聞いてなかつたのか？」

そもそも当然のことを言つているが、わざわざ家にまでくるとは聞いていない。これでは不法侵入ではないか。

それをそのまま言つてやるとそいつは事も無げに口へ返してきた。

「世話係りが家に入つて何が悪い。だいたい俺は法の上に立つものだ。言うなれば俺のすることが正しいことであり御方の意思である。」

「

「いつの高慢な態度が一番悪い。」れも言つてやれつかと思つたが、話が先に進まないので止めておくことにする。

「……で、今度は何を言つに来たんだ？先ほども言つたが俺は騎琉なんてわけのわからないものになるつもりはない。例えそれが神の意思であろうとも……な。」

ずっと恨んできた。この闇色を『えた神を。
誰一人として俺を見てはくれなかつた。異端だ、墮天使だ、と罵られたこともある。

何故俺を作つた？こんなことなら生まれてこない方がよかつた…。

「今更神に忠誠を誓おうとも思わない。……処罰ならくらでも受けやるよ。神の言ひなりになるくらになら消えた方がマシだ。」

けれども田の前の男はにやにやと笑つたままである。一々瘤に障るやつだ。

「…言いたいことはそれだけか？俺はさつと一日後に行われる儀の詳細を説明したいのだが。」

「今まで発言を流されると怒る氣にもなれない。本当にムカツクやつだ。」

「儀は正午から始まるが色々と準備があつてな。お前は一刻前には来い。遅刻しないように俺が連れてついてやる。有り難く思え。」

この俺様な性格はどうにかならないのだつたか。無性に殴りたくなつてくる。

「必要なものは予めこちらで用意しておけ。お前は何かを持つてく
る必要はない。が、明日は聖水を用いて身を清める。そして儀が始
まる一刻前からは水以外口にしてはならない。」

随分と面倒な儀だ。大抵は儀の前に身を清めるだけである。聖水を
使つことなんてまずないし、断食なんて聞いたこともない。

「そしてこのピアスを左耳につける。」

そいつが出したのは小さな黒いピアス。片方しかない。

「これは騎琉の証であるピアスだ。お前はまだ騎琉ではないから片
方だけだ。儀においてお前が騎琉となることを認められれば、神が
片割れのピアスを与えてくださる。つまりこれは儀を受ける資格を
もつものの証だ。」

またこの色か。俺は今最高に不機嫌な顔をしているに違いない。

「断る。俺は儀を受ける意思がない。従つて俺にそのピアスは不必
要なものだ。」

決して首を縦に振らない俺にそいつは小さく溜息をついた。

「……奏希、これは神の決定だ。お前が従わなければ、俺はお前の
最も大切なものを奪わなければならなくなってしまう。」

まるで幼子をあやすかのような優しい口調とは裏腹に、その言葉は
残酷だった。

「…………まさか朱鷺……を……？」

「その、まさかだ。」

ゆつくりと頷くその表情からは感情がまったく読み取れなかつた。
朱鷺が、殺される……？
全身の血がひいていくのがわかつた。軽い眩暈と酷い頭痛に襲われる。

「……何故……？朱鷺はこの件とは無関係だろ？それに、神とはい
えそんな横暴は許されない。法の上に立つものがそれを理由に罪を
犯していいはずがない……！」

「神だから許されるのだ。……お前は大きな間違いを犯している。確
かに法は神が定めた正義だが……神が行うことこそが唯一絶対の正
義だ。……神官達にそう習わなかつたか？」

そいつの表情は変わらない。ただ淡々と言つべきことを述べるのみ。

「だからって……。何故俺じゃないんだ？」

罪を犯したのが俺なら、罰を受けるのも俺でなければならぬ。そ
うでなければ何のための正義なのか。

手をきつく握り締める。爪^{てのひき}が掌に突き刺さり、僅かに血が流れた。

「お前は、そもそもしないと一回後の儀には来ないだろ？そのための保険だ。……逃げても何の意味もないことは知つているな……？」

天界は神の世界。全ては神の意のままに動く。
神を敵に回せば、もはやこの世界に逃げ場所などない。

「地界も現界も無理だ。扉は我々が守護しているからな。……諦め
ろ。お前に選択肢はない。」

朱鷺を死なせてでも断るか。

朱鷺を生かすために受け入れるか。

答えなんて一つしかなかった。

「…………わかった。その騎琉とやらになつてやる。」

「はじめからそういう言え。おかげで無駄な時間を過ごしただ。

俺が頷くと同時にそいつは最初のよほな憎たらしい表情に戻つて人の神経を逆撫するような文句を口づ。まるで先ほどまでとは別人のようだ。

「ただし。」

更に口を開け、そいつの言葉を遮る。

「俺は神に忠誠を誓わない。騎琉にはなる。もちろん命に従つて戦う。けれども俺の意思も命も俺のものだ。決して神には渡さない。」

神の意に逆らうことは、天界において最大の罪。例え誰であろうとも極刑は免れない。

「…………上等だ。それくらい言えなにようでは騎琉にはなれないからな。」

目の前の男はにやりと笑う。それまでのピコピコとしていた空気が穏やかなものへと変わる。

「だが、俺でなければ今頃朱鷺は死んでたぞ?お前事の重大さがわ

かってゐるのか?」

「あんただから言つてゐるんだ。多少の失言へうへなら見逃してくれ
るんだもん!」

神殿で会つたときからそんな氣はしていた。だいたい、そうでなけ
れば俺は今頃こいつして生きてはいないだろ?。

「まあな……一応言つておくが、他のやつらは俺みたいに甘くな
いぞ。そんなことを言おつものなら即刻首が飛ぶ。」

「……胆に銘じておく。」

「冗談で言つてゐるのか、本氣で言つてゐるのか全くわからない。」

「ああ、言つて忘れていたが俺はお前から離れられない。悪いが時期
が来るまで厄介になるぞ。」

「これも捷でな。どんなに短くとも次の洗礼の儀を過ぎるまではお
前と行動を共にしなければならない。どんなときでも、だ。」

「……本気で言つてゐるのか?」

「冗談で済むならこいつちも楽なんだがな。」

洗礼の儀は暦の綜司^{そうじ}が一周する¹と行われる。綜司は全部で十六
種、一年に一つずつ変わつていく。
つまり、俺はこんな人の話を聞きもしない血口^{ちくちく}中心的なやつと十六
年間も共にいなければならぬといふのだ。

そいつは大儀そうに大きく溜息をついた。明らかに楽しんでいるようになしか見えない。

「…………わかった。だが一つだけ条件がある。」

「なんだ? 言つてみる。」

「俺の側にいるときは一言も喋るな。そして半径八尺以内に入つてくるな。」

こんなやつが毎日近くにいるなんてたまつたもんじやない。

「それは無理だな。それでは俺がここにいる意味がなくなつてしまふ。」

あつやうと拒否されてしまった。

「まあ、たつた十六年だ。我慢するんだな。」

たつた、十六年。けれども俺が今まで生きてきた時間の半分。決して短いとはいえない。

「あまり難しく考えるな。十六年なんて案外すぐに過ぎるものだ。天使はその何十倍もの時を生きるものだからな。」

気楽にいけ、といいながら俺の肩をぽんぽんと叩いてくる。しかし、いきなりこんなことを押しつけられて呑気に構えていられる人なんていやしない。もしさるのならば是非ともお目にかかりたいものだ。

「龍騎。」

ふと、思い立つて目の前にいる男の名を呼ぶ。確か神殿で大司教は

「いつ呼んでいたはずだ。

「一応言つておぐが、その名前は俺の本当の名前ではない。だからその呼び方はするな。」

その名を呼んだことがよほど氣に入らなかつたのかその表情は一変して不機嫌なものへと変わつていた。

「じゃあ本当の名前は何なんだ？」

その問いに暫く悩んだ後、そいつが出したのはやはり自分勝手な答えた。

「…………お前が騎琉として一人前になつたら教えてやる。」

「それまではなんて呼べばいいんだ？」

「そんなことは自分で考えや。」

いくらなんでもこれはないだろ。自分で考えてわかるよつなことであればわざわざ聞いたりはしない。

「何でもいい。お前の好きなように呼べ。」

俺の言いたい」とがわかつたのかそいつは少々面倒臭そうに付け足した。

「…何でもいいのか？」

「まともな名だつたらな。」

「……じゃあ紫苑だ。これなら文句はないだろ。」

淡い紫色の花。小さくてたおやかな花。

ちょうど瞳の色が花の色と似ていたから、という安易な理由ではあるが名前の響きとしては悪くはないと思つ。

「紫苑…か。花の名前だな。まあ悪くはない。」

その名前が気に入ったようで、そいつはしきりに領いている。わりにくいやうで、案外わかりやすい性格なのかも知れない。

「…紫苑、何故俺が騎琉に選ばれたんだ? だいたい騎琉なんて言葉今まで聞いたこともなければ見たこともない。何故なんだ?」

神直属の兵。何故そんなものが存在するのか。

天使は神の僕。^{しもべ} 言つなれば天界に存在するもの全てが神の駒である。わざわざ直属の兵を作る意味も必要性も感じられない。

そして何故その存在が隠されているのか。

そんな疑問に紫苑は軽く笑つて答えた。

「それは俺が軽々しく教えていいことではない。自分が選ばれた理由を知りたければ神に直接聞け。騎琉については……どうせ一日後に説明があるんだがな。まあ簡単に教えてやるわ。」

紫苑は窓際にある机に腰掛けた。そのときによつやく帰つてきてからずつと立ちっぱなしだったことに思い至る。とりあえず紫苑と向かい合える位置にあるベッドに腰をおろす。

長くなるぞ、と前置きをして彼は語り始めた。

「騎琉というのは神直属の兵だというのは教えたな? 騎琉にはたいてい地界、現界の監視及び門の管理が任されている。」

現界とは人間が住む世界。唯一存在の確定した世界である。この世

界ではいくつかの法則が存在し、それらが全てを支配している。

それに対するのが幻界。存在の確定しない世界である。ここにあるものは物質ではなく、全てエネルギーなのだという。幻界は更に二つの世界に分類される。天界と地界だ。

「騎琉が作られたのは天地大戦の後だ。あの戦争で天界は大きな被害を受けた。……これは習っているはずだな。これを受け、神は地界への門と現界への門を堅く閉ざすこととした。しかし門を閉ざしてだけでは何の意味も成さない。破壊されてしまえばそれまでだからな。そこで神は騎琉という兵を作った。」

そこまで説明すると紫苑は前髪をかきあげた。遮断するものなくなった瞳は冷たい光を宿している。

「…天地大戦がいつあつたか覚えているか？」

「……蓬曆^{ぼうれき}638年。今から2846年前だ。」

記憶の中から該当する情報を取り出した。間違つてはいなはずだ。

「その通りだ。天地大戦は43年間続き祥曆^{じょううれき}4年に終結を迎えた。何故だかわかるか？」

まるで俺を試しているかのように問いかけてくる。少しだけムツとしながらも覚えているはずの正しい答えを返す。

「それまで一切手を出さなかつた神が参戦したからだ。天界においての神は絶対の存在。いくら地界の兵が凄まじい力を持っていたとしても敵わない。」

その解答に紫苑は満足げに頷く。

「そうだ。地界と天界は独立した世界。例え地界の神でも天界においては天界の神には勝てない。これは現界と幻界、天界と地界が均衡を保つていいからだ。このことも知っているな？」

無言で頷く。

「この均衡は決して崩れることはない。これは普遍の事実である。

「では、その均衡がもし崩れたなら何が起こると想ひ？」

「均衡が、崩れる…？」

世界間の均衡は決して崩れるのではないのだと、天秤は決して傾かないのだと、教えられてきた。

それを変える術はないと、そう信じてきた。

「…そんなことは有り得ない。均衡は普遍の鎖だったはずだ。」

そうでなければ天界は天地大戦の折に滅びてしまっている。

紫苑は俺の言葉に小さく頷いた。

「そう、普遍の鎖だ。決して壊れることのない鎖。……だがな、そんなものはまやかしに過ぎない。普遍なものなど存在しないんだ。」

「まやかし…。」

「鎖は断ち切ることができる。どんなものでもな。」

鎖を断ち切られた世界。与えられるのは滅びという最悪の結末。

「天地大戦の後地界の神は鎖を解く術を探した。そして、2846年もの歳月を経てかの神はそれを見つけ出した。今はまだ何も行動を起こしてはいないが、それも時間の問題だろう。」

嘘のような話。けれども紫苑の田せじとも冗談を言つてゐるような冗談を言つてゐるよ

は見えなかつた。

「だから騎琉が存在しているのだ。地界と境界を監視し、地界の神の企みを阻止する。」

騎琉になることはやうこつこと、覚悟しておけと暗に言われているような気がした。

「今、騎琉は五人いる。そいつらとはいすれ会うことになるだろ。そのときにはいろいろと細かい説明をしてやる。」

そこまで言い終えると紫苑は壁にかけてある時計へ目を向けた。あと少しで日付が変わってしまう。

「今日はここまでにしておいたか。一度に説明したといひでなかなか理解し辛いだらう。」

机から腰を上げ、部屋の隅へと移動する。

「俺はここにいるからお前はさつさと寝る。朝は早く起きろよ。」

人のことを無視した物言いはそのままに、紫苑はその場に腰を下ろした。

「…？隣に来客用の部屋があるんだ。」

そんなところでは休むこともまならないだろ。それに監視されてこようが俺自身も居心地が悪い。

「あまり気にするな。騎琉となるまでは監視役も兼ねているためあまり離れられないんだ。」

「…そんなこと聞いてないぞ。」

「言つてないのだから当然だろ？。」

それがどうした、といわんばかりの態度に文句を言つ氣も失せてしまつた。

「これからはそういう重要なことはなるべく早く言つてくれ。…他に言つてないことなんかないよな？」

「……そうだな。こういったことに関してはもうないな。」

少しだけ考えた後紫苑は何度か首を縦に振った。
小さく安堵のため息をつく。しかし、監視されていのだと想いつとなんだか居心地が悪い。

「いろいろ聞きたい」ともあるだろうが、明日全てを説明してやる。
だから今日はもう寝る。」

「わかった。」

素直に頷いて布団の中へ滑り込む。ひんやりとした温度が疲れた身体に心地よい。

「…おやすみ。」「ああ、おやすみ。」

小さな声で言つたにも関わらず、紫苑は言葉を返してくれた。その一言がなんだか新鮮で心地よいものに感じられた。

もう一度時計を見る。既に今日が昨日へと変わっていた。あと一日と半分すれば誓いの儀が執り行われる。

漠然とした不安は消えることはなく、徐々に大きくなっていく。目を瞑つてゆっくりと息を吐き出した。そのまま眠りにつく。その夜、俺は久しぶりに夢を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7063c/>

霸玄の糸

2011年1月27日12時42分発行